博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　岩崎　稔　　　　　印

学位申請者　　Maja VODOPIVEC

論　文　名　　On Possibility of the Postwar Knowledge – Continuities and Discontinuities in the Thought of Kato Shuichi.

【審査の結果】

本学位申請論文は、日本の戦後啓蒙の代表的な知識人であり、戦後初期から２００８年まで旺盛な批評活動を展開して大きな足跡を残した加藤周一を対象として、その知的な活動の全体像を再構成的に評価するとともに、その思想を、「戦後知」のいまだ汲みだされない可能性を発見するための手がかりとして位置づけるものである。加藤周一は、実際には６０年に及ぶ長い期間を現役の批評家として活躍しつづけたこともあり、また最晩年には明確に日本国憲法擁護のための運動にコミットしたという事情もあって、言及されることが多い割には、その思想と活動の全体像に正面から取り組んだ学術的な先行的研究はほとんど見当たらない。そのなかで、ヴォトピベツ氏の論文は、英語という表現媒体ではおそらく初めて、その思想を全体的に考察した先駆的な労作である。しかも、その議論のなかには、戦後啓蒙の一思想家をたんなる近代主義の一例に還元するのではなく、むしろ趨勢となっている近代批判や普遍的知識人批判が見落としている文脈を発見する「抗事実的な」姿勢を含んでいる点でも、加藤周一論として高く評価することができる。

審査委員会は、論文審査と最終審査（公開口述審査）に基づいて、審査員の全員一致の評決により、学位申請者であるヴォトピベツ氏に対して、博士学位（学術）を授与することが適当であるという判断に達した。

なお、本審査委員会は、岩崎稔を主査として、早稲田大学大学院文学学術院の鳥羽耕史准教授（日本語文学）、本学の新井政美教授、岡田昭人教授、伊勢崎賢治教授の5人から構成されている。

【論文の構成と概要】

本学位申請論文は、序論と結論を挟んだ以下のような七部、十八章から構成されている。

序論

第1部　戦後という時代

　　第一章　戦後啓蒙

第二章　戦時期から戦後へ
第三章　戦後知——評価の手がかり
第2部　旅すること
第一章　旅と近代性
第二章　社会主義の三つの顔——ウズベキスタン、クロアチア、ケララ紀行
第3部　翻訳から雑種性
第一章　翻訳と近代化
第二章　雑種文化
第三章　日本文化における時間と空間
第4部　歴史論争
第一章　昭和史論争
第二章　日本文学史序説
第5部　ひとつの生、ひとつの死
第一章　『羊の歌』——日本近代を旅する物語
第二章　死
第6部　抵抗の精神と20世紀
第一章　『言葉と戦車』、知識人の役割
第二章　日本における1968
第三章　9.11と核問題
第7部　歴史の十字路において
第一章　半世紀後の広島
第二章　加藤の思想における憲法9条
第三章　日中関係
結論

ヴォトピベツ氏は、日本における「戦後」という特有の時間概念が、いうまでもなくアジア太平洋戦争の敗北の意味に向き合うこと、そしてその事態を回避できなかった日本の知的精神に対する内省から出発したことを確認しつつ、あらためてその戦後の潜在力を、加藤周一というひとりの知識人の知的活動とそのズレによって考察しようとした。そのために、まずは序論と第一章で、戦後啓蒙知識人に主導された「戦後」という概念の含意を同定しようとしている。近代日本の特性の考察、言い換えれば国体論や天皇制国家、あるいは帝国主義的膨張の構造的分析として分節化されるとともに、つねにそこに、そうした現状を変革する主体、あるいは近代的自我である主体性の探究という課題が迫ってこざるをえない。加藤周一は、戦後啓蒙知識人のなかでも、とりわけ西洋近代を志向した近代主義的発想に立脚する理論家だと評される思想家である。実際に、その後半生の舞台をヨー

ロッパに選び、日本語で表現しながらも、フランスに住むという生き方は、いわば戦後知識人の西洋志向を端的に露呈した存在として攻撃される理由にもなった。かれは、西洋的な近代を、日本の市民社会が後追いするべき規範的な過程であると捉え、戦前日本の軍国主義化を防ぐことができなかったのは、西洋的ヒューマニズムを担う民主主義的な主体が、日本国民のうちに確立されなかったことに原因があると断じ続けてきたことは確かである。

しかし、ヴォトピベツ氏の評価では、同時に加藤周一は、事実としての戦後を賛美するのではないことが重要である。たとえば、加藤は、戦後の象徴天皇制に意匠を変えた天皇制的権威主義の構造を一貫して批判した最初の知識人のひとりである。加藤のこの姿勢は、戦時体制の非合理主義を徹底的に批判するとともに、西欧民主主義を批判し、大東亜共栄圏思想を正当化することに腐心していた戦間期、戦時期知識人たちの翼賛的姿勢や戦争協力の記憶に対する非妥協的な対決でもあった。

ヴォトピベツの議論によれば、加藤のもっとも顕著で、ある意味ではその強固な個性ともなっている「近代性」への探究姿勢は、まずは世界を旅することによって現実味を帯びていくことになるという。この「トラベローグ」への着眼と、旅の移動や越境によって開かれる特別な認識という考え方は、映画におけるいわゆる「ロードムービー」のジャンルや、「紀行文という形式を通した批評のスタイル」に類似したスタイルを想定した、ヴォトピベツ氏の独特の加藤解釈である。論文第二部は、とくに中央アジアのウズベキスタン、南アジアのケララ、そしてヴォトピベツ氏自身に深く関わりのあるユーゴスラピアのクロアチアという3か所を主題として、加藤の批評にとくに深く踏み込んでいる。この「トラベローグ」論では社会主義の希望が共通の問題となっているが、その再解釈のうちには、今日の紋切り型の社会主義批判や陳腐化とは違った感受性を考えようという姿勢が貫かれている。

こうした旅の経験が加藤の「周辺」的立場や「距離からの視点」といった理論とともに、のちの雑種文化論に示されているような日本の近代性の評価の仕方にも影響を与えているともいう。雑種性の概念は、加藤によって、日本の文化と国際関係の思想の特殊性を説明するために論じられてきた。雑種文化論は、一時期は、加藤周一の代名詞のように受け止められていた概念である。それは、今日の文化的ハイブリディティの議論からすると、明らかに実体的な議論に捉われているように見える「雑種性」概念ではあるが、ヴォトピベツ氏は第三部において、これを、近代化国家としての日本の文化的な布置をめぐる切実な問題意識から出てきた問いとして、同概念のその時代における受容史も含めて、再検討した。

第四部では、昭和史論争とのかかわりにおける加藤の言説とともに、『日本近代文学史序説』が掘り下げられているし、第六部では、プラハの春を機縁とした『言葉と戦車』に表われている知的な営みと政治的軍事的暴力との関係についての原則的な思索が整理され

ている。たしかにそれらは、その時代ごとに話題を呼び、ときには通俗化してしまうほどに多くの読者を獲得した評論であるが、ヴォトピベツ氏はそれらをひとりの、そして持続的な戦後啓蒙知識人の発言の過程として、長い見通しのなかで評価しているのである。

第五部の『羊の歌』論を中心とした部分は、とくにその議論の細部までよく読みこまれており、印象としてはヴォトピベツ氏が加藤周一にもっとも共感的により添いながらその仕事を理解しようとした部分であるように見える。

またヴォトピベツ氏は、第七部で、日本とアジアに対する加藤の姿勢が、国内状況と国際状況の転換に応じて変化していったことを強調している。とくに冷戦の終焉は、加藤による日本のナショナル・アイデンティティをめぐる議論を変化させた。もちろん、冷戦の終結とともに政治的スタンスや世界理解をシフトさせた知識人は少なからずいるだけではなく、むしろその推移は構造的に発生したというべきであろう。加藤はその一部分に過ぎないと言うことはできる。しかし、加藤はそれまで、ことさら西洋近代主義の知識人として位置づけられ、またそのことをもって批判されてきた人物であっただけに、変化の意味は大きいという。たとえば55年体制が確立された翌年である56年に『雑種文化論』を出したことは、ヴォトピベツ氏によれば、ある意味では、朝鮮戦争休戦後の極東の緊張関係から日本だけが高度経済成長に進み始める状況において、文化論という形で日本をアジアから切り離す言説として機能したと批判することも可能である。加藤に対するこのような批判のパターンは、戦後啓蒙知識人が投げかけられてきたそれであり、戦後史においては、60年安保闘争と68年の学生叛乱期にもっとも厳しくなる。そのため、以後加藤周一を、すでに歴史的には清算された戦後啓蒙の陳腐な残滓であり、とるに足らない存在として片づける批評も少なからずあることを、ヴォトピベツ氏は、しかるべき根拠があることと認めてはいる。ただし、同時にそのような類型的な清算では、知的に非常に長い間活躍した知識人のなかにある煩悶と変化を適切に評価することはできないとも考えるのである。それは言い換えれば、笑うべき存在としてうち捨てられている営みの一面にすら、「救済的批評」を試みることはできないかと設問することである。

ヴォトピベツ氏によれば、加藤の日本的なナショナリティに対する感覚は、同時代的な国際的布置、とくに日本と西洋との関係性の意識に強く規定されていた。安保闘争以前の加藤は、親西洋的感情を持ち、保守派に対抗するリベラルであり、いわる「進歩的知識人」の典型であった。『雑種文化論』もその脈絡で出てきている。同様の傾向は、60年代末に書かれた『日本文学史序説』においても明確な形で読み取ることができる。そのことは、これらの作品において、マイノリティの文学、在日文学の著者が度外視されていることからも明らかである、という。加藤にとって、この時期の対照項はもっぱら「西洋」であったのである。しかし、その思想布置が変化していく決定的な転機が冷戦の終結であった。すでに老境に差し掛かっていた加藤であるが、戦後50年を総括して、変わってきた対外関係のなかでの日本社会の未来を主題的に考察するようになった。さらに90年代に入ると、

歴史認識をめぐる日本社会のなかでの険しい論争や歴史修正主義的言説に関する議論にも積極的に関わるようになっていく。この変化も、実はそれまでの加藤周一のスタンスからすると、かなり飛躍のあることである。加藤周一は、それまでは戦後啓蒙の知識人のなかでも、一切といっていいほど直接の政治運動に関わることがなかったからであり、むしろその姿勢を「高みの見物」という韜晦的な表現で確信犯的に表現するひとだったからである。それが、この 90 年代以後、政治運動にも積極的なスタンスをとるように変化し、それとともに、もともとの親西欧的な心情からアジアへとその関心を移行させている、という。

ヴォトピベツ氏は、加藤の死の 4 年前、つまり 2004 年に呼びかけ人として「9 条の会」を立ち上げたことも、けっして周辺的な事情であるとは考えていない。加藤は憲法 9 条を、現実から乖離したユートピア的理想ではなく、むしろ日本人の国民的アイデンティティの一部であり、日本がこれから世界において平和的に生存するための不可欠な構成部分であると捉えていたからである。これらの加藤の変化は、かれの視点が西洋に敗北した日本という問題から、侵略戦争によってアジアに深い傷跡を残したアジア近隣諸国へと移っていったことを示しているという。

【論文の評価】

以上の議論に対して、審査員のなかからは、これまでほとんど本格的に論じることが回避されてきた加藤周一について、その主要な著作に重点をおいて評価し直し、全体像を描いたこと、とくに『羊の歌』『雑種文化論』『言葉と戦車』のような戦後文学史のなかで伝説化している作品を、こまかく検討している点について評価する声が多かった。何よりも、ともすると「戦後の終わり」という議論のなかで簡単に片づけられがちな加藤周一について、長い知的生産のなかにあるスタンスの変化に注目して、その可能性を救い出そうとする姿勢は評価に値するものである。論文の表題にある「戦後知」という表現は、ヴォトピベツ氏なりに、今日の日本社会のなかでの最新の論争的な概念の転用であることが、最終公開審査の場で明らかにされた。パワーポイントを使った説明では、「戦後知」とは、既存の「戦後思想」「戦後精神史」とは一線を画した視座の設定を含意している。つまり、さまざまなこれまでの清算主義的な批判では片づけるべきではない「戦後的なもの」のなかにある賢さ、あるいは賢慮のようなものを表わす言葉であり、これ自体は、最近、民衆史家である安丸良夫が編纂した『戦後知の可能性』のなかに登場した概念にインスピレーションを得て、そのアイデアを敷衍したものだと説明した。こうした点にも、たんに一時代の戦後啓蒙の思想家の個別に再評価するだけではなく、最新の知性との対話的な姿勢を持ちつつ、それを通じて戦後精神そのものの大きな再解釈の展望を含意しているヴォトピベツ氏の懐の深さが垣間見えた。

このように、ヴォトピベツ氏の論文に対してかなり高い評価が与えられるとともに、若干の批判や注文も、今後の発展を見据えつつ、提出されたことを付言しておかなくてはな

らない。それはとくに、論文のなかで先行研究をそれ自体として整理することが手薄であると見える点があることや、全体として、論文を通じて解明しようとする仮説と方法意識が、もっと命題としてシンプルに提示されてもよかったのではないかという不満として表明されたのである。これらの批判に対して、ヴォトピベツ氏は、先行研究を明示的に列挙できなかった弱みは認めつつも、加藤周一研究は、実際に日本文学史の分野でもほとんどまとまった形での学問的な仕事がいまだ出ていないのであり、その点では自分の論文が先駆的な役割を果たさざるをえなかったのだ、という自負を表明した。また、本論文の方法的な前提は「カルチュラル・スタディーズ」であるという自覚を持っていることが表明され、そのために、議論に曖昧な箇所が残ったことは認めつつも、言説を対象とする批評の場合に、単純なリサーチ・クェスチョンとそれへの解答というスタイルとは違った書き方も必要になると感じていた事情が明らかにされた。

これらの弁明や説明を通じて、審査員にはより理解が深まった点もあり、また今後の同氏の発展を期待させる点として理解できるところもあった。

【総合的判断】

以上の審査を経て、審査委員会としては、全員一致で、マヤ・ヴォトピベツ氏から提出されている請求論文が、博士学位（学術）を授与するのに相応しいものであるという結論に達したので、ここに報告する。